

こうじょう
口上

け さ ごほんぼう ところごめんどう ぎ おねがいもうしあげ すなわち ごりょうしよさま なまえ かきつけ とおり かじゃくこう とり
今朝は御繁忙の処御面倒の義御願申上、即（カ）御両所様名前にて書付の通、蝸石公に取

かえたのみそうろうところ
替頼候処、【今朝はお忙しいところ、ご面倒なお願いをしました。お二人（五声・梅竹）の名前で証文を作り、蝸石氏に借金の立て替えを頼んだところ、】{「書付」は証文のこと。「取替」はお金を立て替えること。}

ふうりゅう うえ しょうもんだうけとりとりかえそうろう ぎ いかん つい じゅうりょう ところふたり わりあいさしだしそうろうこと
風流の上にて証文等受取取替候義は如何。就ては拾両の所二人にて割合差出候事にて

そっきん さしだ もうすべき こと つき なにとぞそのおぼしめし
は即金に差し出し可申との事に付、何卒其思召にて、【「趣味に使ったお金なのだから、証文などを受け取ってお金を立て替えるというのは、いかがなものか。ついては、十両を二人で割って差し出すのなら即金で差し出すべき」とのことでしたので、なにとぞそのお考えに従って、】{「風流」は、詩歌や書画などの趣味のこと。なお、明治以降、お金の単位は「円・銭」になったはずだが、1円のことを引き続き1両と呼ぶこともあったらしい。十両といえば大金である。}

ごせいこん ごきちようしちりょうにだ かど ござそうらえ ごりょうきん おひきうけ のこ ごりょう ところばいちくくん かじゃくくん
五声君は御記帳七両貳駄の廉も御座候へば、五両金御引請、残る五両の処梅竹君蝸石君

おこころえ くだされそうろうようひとえにねがいあげたてまつりたく このだん ごしょう ちなしくだされたくそうろう
にて御心得被下候様偏奉希上度、此段御承知被成下度候。【五声君は寄付金帳に七両二分と書いているのですから、十両のうち五両を引き受けて、残りの五両を、梅竹君・蝸石君に引き受けていただくよう、この件をご承知下さい。】{「御記帳」は、芭蕉堂建設のための寄付金帳のことか。「貳駄」がわからないが、七両二分、つまり七円五十銭のことか。}

しかながら おうちわ こと ござそうらえ せつしゃ わりあいがましきぎもうす ござなくそうろう
乍併御内和（カ）の事にも御座候へば、拙者より割合ケ間敷義申には無御座候。【しかし

ながら、内輪のことですから、私（＝井月）が支払いの割合についてとやかく言うつもりはありません。】{梅竹は五声の叔父、蝸石は五声の母の甥（つまり五声の従兄弟）。つまり親戚どうし（＝内輪）の問題なのだから、よそ者の私が口をはさむつもりはない、と言っている。}

いず みぎきんだかあいどのいもうしそうら え そうろうあいだ ごりょうしょさま いっぴつ か せきくん おつかわ みぎきん
何れとも右金高相 調 申 候 へばよろしく 候 間、御両所様にて一筆蝸石君へ御遣し、右金

す おとりかえ あいなりそうろうよう おはから い なしくださりそうろうよう いく え ねがいあげたてまつりそうろう
子御取替に相成 候 様御計ひ被成下 候 様、幾重にも奉願 上 候 。【なににせよ、十両の

金額が調べばそれでよいので、お二人から蝸石君へ一筆書いて、立て替えになったことを取り計らって下さいますよう、重ねてお願いします。】

も はやよ じつなく ごようさきおそれいりそうら え このだん おねがいまでかくのごとく ご ぎ そうろうきょうきょうとんしゅ
最早無余日御用先 恐 入 候 へども、此段御願 迄 如 此 御座 候 恐 々 頓首 【もはや日がなく、

ご用先には恐れ入りますが、この件お願いいたします。】{「御用先」は、お金を用立てなければならぬ相手、という意味か。昔は、歳末に借金の取り立てが来た。この手紙は師走の十五日に書かれたものであり、あと半月しかないのに十両もの大金をそろえてほしい、という無茶な内容である。いったい何に使ったのか。金額の大きさからして、明治五年におこなわれた送別会の経費かもしれない。書簡 一 にも「送別会興行の雑費少なからず、ついに借金に首くくるとか」とある。}

し わすじゅう ごにち
師走 十五日

なおなお なん お てすう ご かくせいなくされたくそうろう
尚々 何とも御手数ながらよろしく御鶴声被成下度 候 。【なお、何ともお手数ですが（蝸石氏

に）ひとこと言ってください。】

せいげつはい
井月 拝

ご せいくん ばいちくくん どうはいよう
五声君 梅竹君 当俳用